

I はじめに

非漢字系の学生にとって、五、六か月の短期間にたとえば漢字五百字を読んで書けるようになるのは至難の技である。視覚的記憶力に優れている学生であっても、学習漢字数字が百字以上になると、何らかの整理法を考える必要が生じてくる。もちろん学生は、品詞別の整理法を教科書学習の過程で身に付けている。名詞の漢字（本、車、家 e t c）や動詞の漢字（読む、話す、書く e t c）や形容詞の漢字（大きい、高い、安い、e t c）などは、学習頻度が高いし概念的にも具体的に身近なものなのでよく覚える。しかしそれほど具体的ではない漢字、あるいは漢字独特の複合語となると、学習頻度の高さは期待できないし、概念的にもかなり抽象的である。ある程度以上の漢字学習にも、もっと一つ一つの字の意味や形の理解や造語の方法を指導しなければ、自分の混乱を独力で解決する力がいつまでもつかないのではないだろうか。

先へ進むために必要になってくるとされる整理法が、部首による整理方法である。ここでいう部首とは、漢字を字体から見て、同じ部分を含む点を目じるしにして分類整理し、いくつかのグループを作った際、そのグループの代表となる形である。そしていくつかの漢和辞典の部首索引にある程度共通している分け方がその部首の具体的な分け方である。品詞別の整理が字の意味からのものであるとすれば、部首による整理は字の形によるものである。

日本人は、学習した漢字の整理のためのみならず、いずれ漢和辞典を使うという目的もあって、小学校から少しずつ部首の概念を学習してきた。それ故、その学習にかかった手間と苦勞を、いまさら学習時間数に換算するのは難しい。その難しさが混然としている故に、いっそう漢和辞典の部首索引を、将来漢和辞典を使用する機会があまりあるとはいえない留学生に教えるのはどうか、部首の概念など教えるよりも、読み書きに徹底するのが本筋ではないかという考え方もある。

だが一方では、百パーセント暗記に頼る従来の漢字指導では、何度読んでも何度書いてもいざという時には忘れ、あるいは同音異義字、似た形の字、似た意味の字などと混乱し、しまいには学習意欲を喪失させてしまう例が少なくない。漢和辞典を使うにせよ使わないにせよ部首の概念、そしていずれは音符の概念を紹介することは、長い目で見ればその学生の日本語学習への自信というものに結びつくと思われる。

1987年9月に留学生教育センターで漢字学習研究グループが作成した「基本漢字の練習Ⅱ」に部首索引をつける際、従来の漢和辞典の部首索引と同じものを、そのまま留学生に使わせるのには疑問があった。今までの漢字指導経験からみて、学生は漢和辞典の部首索引とは違った、しかしそれはそれで学生全体に共通したやり方で、字形からグループ分けしていると思われたからである。そこで学習予定の五百字から下記の五十四字の漢字を、漢字の字形から、あるいはいままで学習し

た部首の知識から、八つのグループ (1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8) に分類させてみた。そしてその結果を「基本漢字の練習ⅠⅡ」の部首索引作成 (〔資料〕参照) の参考とした。実験は便宜的なものであったが、その結果はそれなりに一貫性のあるものであったので、さらに考察を続けることにした。

Ⅱ 実験

1) 被験者

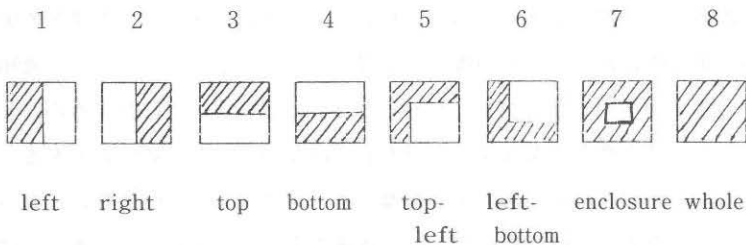
学生には筑波大学留学生教育センターで日本語の学習を始めてから三週間目 (学習漢字数は百字ぐらい) から部首の導入を始めている。初めに「へん」と「つくり」、次に「かんむり」と「あし」、そして「たれ」「にょう」「かまえ」の順である。

この実験は、「きそにほんごかいわ」の二十七課を終わったあたり、留学生教育センターで日本語を始めてほぼ二か月で、学習漢字数は三百字ぐらいのところ、実施された。

学生数は、前期二十名、後期十九名で計三十九名である。学生は全て非漢字系で当センターに来る前の日本語学習歴はあまりなく、あっても簡単なあいさつ、あるいは初歩の文法程度で、母国で漢字を習った学生は二、三名であった。

2) 課題

このレベルの学生が既習あるいは未習の漢字を部首分けしようとした時、どのような点で分けた方に困難を感じるであろうか。また我々が当然とする分け方はどのくらい学生にも通用するものであろうか。実験ではまず



という図をみせてから、英語で

In which way can the following kanji be divided ? (8 is the meaning side)

とインストラクションを与え、答えは各漢字の下に上記の図の番号で答えさせた。例として

EX.1	EX.2	EX.3	EX.4	EX.5
「記」	「留」	「週」	「雪」	「生」
1	4	6	3	8

を与えた。

グループ分けをさせた時に、単に「左右」だけではなく一応「へん」のグループか、「つくり」のグループかというように意味の位置の上からも分けさせた。しかし本来の目的としては字をどのように分けるかだけで、意味がどちらかは、どのくらいわかって分けているかの参考のみにとどめた。字がどのように分けられるかあるいは分けられないかだけで、学生の頭の中にどの程度漢字の部分のリストが出来ているかわかると思われたからである

実験に使った漢字は、次のとおりである。()内の字は後期学生数十九名のみが解答したものであるので今回の実験では、参考として使用した。

01夫, 02品, 03県, 04古, 05飛, 06相, 07並, 08西, 09事, 10金,
11山, 12竹, 13糸, 14右, 15円, 16長, 17員, 18決, 19式, 20公,
21南, 22建, 23予, 24成, 25内, 26介, 27市, 28母, 29友, 30色,
31弟, 32北, 33乗, 34発, 35起, 36細, 37見, 38名, 39置, 40考,
41店, 42始, 43着, 44夜, 45足, 46向, 47参, 48加, 49鳥, 50奥,
51良, 52八, 53出, 54美,
(55森, 56当, 57表, 58非, 59直, 60冬, 61変, 62番, 63両)

3) 仮説

このうち学生の力から見て、漢字学習研究グループがあらかじめ予測したのが、次のようなグループ分けである。

左 右 : 相, 竹, 決, 北, 細, 始, 加, (非)
上 下 : 古, 並, 長, 員, 公, 南, 予, 介, 市
色, 発, 見, 置, 夜, 足, 参, 奥, 美
(当, 表, 冬, 変, 番)
た れ : 右, 友, 名, 考, 店, 着
によ う : 県, 建, 起, (直)
かま え : 円, 武, 成, 内, 向, (両)
分けられない : 夫, 品, 飛, 西, 事, 金, 山, 糸, 母, 弟
乗, 鳥, 良, 八, 出, (森)

これは、象形文字、指示文字が「分けられない」グループには入れられないのではないか、ごく少数の部首しか覚えていないのではないかという予測から分けられたものである。

Ⅲ 考察

1) 左右に分けられる字

(表1)

	相	決	始	加	細	北
左右に分けた	97%	92%	92%	92%	82%	79.5%

(学生数39名中)

漢字を「左右」に分けるのは、予測どおり問題なく出来る。

一つには「へん」は象形文字を部首にしたものが多いからだと思われる。学生にとって象形文字、指示文字は最初に学習するせい、また絵文字で親しみやすいせい、取得率が高い。その象形文字が「へん」を構成しているので、その部分の認識は容易であるらしい。しかし知らない象形文字、あるいは見なれない部首の漢字では、他の分け方との混乱が生じる。表1を見てわかるように、木へん、さんずい、女へん、力へんの漢字は、39名中36名までが「左右」に分けられるが、「細」の糸へん、「北」のつくりは見なれていないため、糸へんを「たれ」であるとした学生が4名(約一割)、「北」を「分けられない」とした学生が5名いた。「細」の「糸」という部首は六画で比較的複雑に見えるし、左の「田」に比べて縦長な感じがするので田におおいかぶさったように見えたのだと思われる。「北」は見なれたものを手がかりに分けようとする学生には、分けにくい字であろうと思われる。

象形文字の導入がうまく出来れば、漢字を「左右」に分けるのは簡単である。「つくり」の漢字については、例が少ないのではっきりとは言えないが、大方の学生はできるであろう。しかし「つくり」が見なれないものである場合、一、二割は「分けられない」とする学生が出る可能性がある。

「左右」のグループに入れるだろうと予測した前期のグループ分けの内、残ったのが「竹」と「非」である。これらは上記の表1の字が大部分の学生によって「左右」に分けられたのに比べ、「左右」としたグループと「分けられない」としたグループの数の差が大きい。「竹」では、「左右」に分けたのが24名、「分けられない」としたのが13名である。また「非」では、学生数19名中「左右」が12名、「分けられない」が7名である。「竹」や「非」のように左も右も同じ形の場合、部首の所在が明かではなくなり、左か右かという聞かれ方では、どちらとも答えられないためと思われる。

2) 上下に分けられる字

(表2)

	公	予	置	発	色	南	夜
上下に分けた	72%	66%	66%	64%	61%	56%	56%
分けられない	20%	31%	10%	25%	28%	15%	2.5%
左右に分けた			7.5%			5%	15%
によう			7.5%				5%
かまえ				5%	5%	12.5%	
たれ							15%

(学生数39名中)

「左右」に分けられる字の例を果てわかるように、学生には象形文字と部首の関係のように前に独立した字形として見たことがある部分を手がかりに字を分けようとする傾向が見られる。「へん」のようにわかりやすい部分がある字はよいが、「かんむり」にしても「あし」にしても見なれた部首は少ないので、識別力が落ちることが予想された。

上記の表にはないが、既習の漢字「古」と「貝」は、それぞれ「口」、「貝」がすでに象形文字として導入されているので問題なく、「古」は35名が、「貝」は32名が「上下」に分けられると答えた。

しかしそれ以外の字は上記の表2の学生の散り具合から見てもどのように分けるかよくわからなかったと思われる。始めに「公」であるが、このようにはっきり上と下に離れている形は問題なく「上下」のグループに属すると思われるが、8名が「分けられない」としている。それが「予」になると、上と下が接しているからか、「分けられない」とした学生が12名に増える。この二つの漢字は、漢字としてではなく、かたかなとして見れば、「公」の上の部分である「ハ」であれ、下の部分である「ム」であれ、「予」の上の部分である「マ」であれ、部分を探すことは出来る。「上下」に分けた人数が28名、26名という数字は、この説明として説得力がある。実際授業の際、たとえば「私」という字について答えさせると字の右を「かたかなのム」というような言い方する。このような部分の認識は日本人のみならず留学生もよくすることである。ただ留学生の場合は幅が、ひらがな、かたかな、漢字に留まらずアルファベットにまで及ぶ。加納千恵子その他の発表による「筑波大学日本語研修コースによる漢字学習プログラム」では、「泳」という字を再生させると「ミJK」という形になった例が紹介されている。

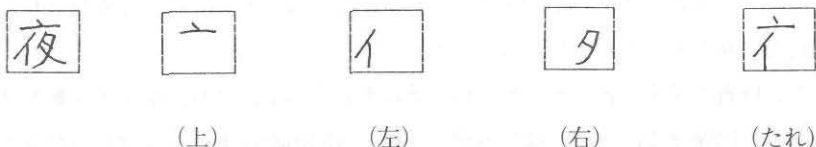
「置」は、「上下」とも「によう」ともとれる形をしている。「左右」のグループは、「によう」を「左右」でとる学生も多いので、潜在的には「によう」のグループの一部と考えられる。この6

名には「四」よりも「L」が印象として強かったと思われる。

「発」という字は、日本人の目でみれば、「𠄎」が「かんむり」であろうが、これはたとえば象形文字の「金」と比べると頭が重いので「かまえ」に見える学生がでてくる。ちなみに「金」は「上下」は15名、「分けられない」が28名で、「金」を象形文字として記憶している学生が多いことを示している。

「色」は「匸」の「かまえ」をとったのが2名いた他はかたかなの「ク」から「上下」とした学生が多く、分け方の根拠としては「公」「予」と同じとみてよい。「色」を「上下」に分けた学生24名の内、分け方の根拠としては「公」と「予」を「上下」に分けた学生は15名、「公」あるいは「予」を「上下」に分けた学生は8名であった。

本当に初級の学生に漢字が「上下」に分けられるかという問題を提起するのが、次の「南」と「夜」である。上記の表を見てもわかるように、学生の混乱はかなり複雑でしかもそれなりに論理的である。「南」を「十」をとって「上下」に分けなければ、「分けられない」とするか、「かまえ」とするかは難しいところである。次に「夜」であるが「𠄎」でとれば上下、「イ」「夕」でとれば左右、「𠄎」と「イ」でとれば「たれ」になる。



「夜」という字は、分けられる部分が多すぎると学生に迷いが生じるよい例である。「左右」に分けた学生6名、「たれ」に分けた学生6名で、両方合わせて12名が「かんむり」とは違う部分を選んだ。

上記の表は学生の半数以上が「上下」に分けた字である。それとは対照的に下記の表は、漢和辞典に従えば「上下」に分けられるはずだが、実際に「上下」に分けた学生が半数より少ない字の例である。

(表3)

	介	市	長	並	奥	鳥	美
上下に分けた	51%	49%	46%	46%	46%	43%	41%
分けられない	41%	46%	46%	43%	33%	49%	54%
かまえ					12.5%		

(学生数39名中)

象形文字の「鳥」と「長」を除いて、いずれの字も「上下」に分けられるとも、全然「分けられない」ともいえそうである。

部首導入の問題は、字形から見てこのように分けられるとも分けられないともはっきり言いがたい字が、特に「上下」に分けられている字に多く、それらをどのように指導していくか、すっきりした説明ができないというところにある。予測した字のリストにない字で、学生が「上下」に入れたのがこの「鳥」であった。「鳥」は象形文字であることを喚起すればよい。

表4は、こちらが「上下」に入れるであろうとした「参」「見」「糸」「足」の表である。

(表4)

	参	見	糸	足
上下に分けた	54%	54%	28%	25.5%
分けられない	33%	38%	64%	31%
た れ				33%

(学生数39名)

表4の「参」と「見」は「上下」に分けた学生数が少なく順序としては表2と表3の間にくる。表2ほど「上下」に分けた学生数が多くなく、表3ほど「分けられない」とした学生数が多くない。やはり「上下」に分けられる字の難しさを証明している。「足」は「たれ」あるいは「分けられない」とした学生数が、予測を上回った。象形文字としての説明が不十分であったせいだと思われる。予測して字のリストを、実際に学生が分けた「上下のグループ(20名以上)」と分けられないグループ(17名以上)」を図にすると次のようになる。象形文字は「上下」のグループの人数と「分けられない」のグループの人数がほぼ同数であった。

(図1)

(上下に分けられた)		
古 員 公 予	(象形文字)	(分けられない)
置 発 色 南	長 足	
夜 介 見 参	鳥	美 市 並

上の図を改めて見ると、「上下」に分けられるべき字で「分けられない」グループに入ってしまったのは、左右対称の字である。

左右対称の字については、「分けられない字」の項で改めて述べたい。

3) たれの字

(表5)

	店	友	考	着	右	名
た れ	90%	59%	46%	36%	36%	25.5%
分けられない		31%	15%	23%	36%	28%
上下に分けた	5%		25.5%	20.5%	12.5%	28%
左右に分けた				12.5%	12.5%	10%

(学生数39名中)

上の表5は左の「店」から順に「たれ」の識別に自信を失うとどのような混乱を生じる可能性があるかをよく示している。「店」はほぼ全員が「たれ」を見つけた例である。しかしそれが「友」では字形を手がかりに分けようとする、四本あるいは五本に見える線が様々な角度に伸びていて分けるのが難しくなる。

「考」「右」「名」では、左上にある部分を「上」とするか「左」とするかだけの違いであるから、この場合「上下」も「左右」も同じである。これらの字を「上下」あるいは「左右」に分けた学生は、見知った「土」「口」あるいは「夕」を手がかりに分けたと思われる。「たれ」の字を「上下」あるいは「左右」にわけた学生は「たれ」の認識がはっきりしていないだけで、字として分けられることに同意している点において「たれ」のグループに近いと見てよい。

こちらの予測した字で、学生も選んだといえる「たれ」の字は、「店」と「友」だけであった。「着」「右」「名」については、「たれ」の位置の見誤ってこのような結果になった。

4) によの字

「によ」については、「え」は見なれているが、他はあまり見なれていないので、「建」にせよ「起」にせよ字形がはっきりしていても、識別率は低いことが予測された。

(表6)

	県	建	起	足	直
によ	56%	49%	38%	33%	33%
分けられない	10%			31%	5%
上下に分けた	28%			25.5%	
左右に分けた		43%	49%		5%

(学生数39名中)

表6を見ると象形文字である「足」を除いては、みな何らかの形にわけられるとしている。これも「たれ」と同じく「上下」と見るか「左右」と見るかの違いであるから、「によう」は、字の左下に位置するということと、おのおの意味がわかるようになれば問題はないと思われる。予測では「上下」に分けると思われた「足」は、「上下」も「によう」も「分けられない」ともいいがたいぐらい学生数が分散した。しかし導入の仕方次第では、「によう」も「たれ」と同じく、十分初級でも識別出来るようになるであろう。

5) かまえの字

(表7)

	向	内	円
かまえ	59%	31%	10%
分けられない	31%	49%	74%

(学生数39名中)

上記の表は、内側が「かまえ」に接しているかないかで全然印象が違って見えるという例である。「上下」分けられる字の例でもわかるように、上と下が接していると「分けられない」と思ってしまう学生数が急に増える。「かまえ」も同じで「円」では「分けられない」とする学生が29名で「かまえ」とする学生はたった4名になってしまう。

「式」も「成」も予測した「かまえ」ではなく、「分けられない」としたのが両方とも17名、その他は「左右」に分けた。この形は、答えられなかった学生が多い。

6) 分けられない字

(表8)

	夫	妻	母	八	出	山	円
分けられない	95%	84.5%	82%	82%	77%	74%	74%
上下に分けた	5%	10%	2.5%	5%	20.5%	20.5%	10%
かまえ			12.5%				10%
左右にわけた				12.5%			

(学生数39名中)

表8を見てわかるように、学生が目から見た「分けられない」字は、一口でいうと左右対称の形が多い。指示文字で形としては右と左に離れている「八」を除いては、この対称性が字を「左右」に分けることを難しくしている。

また決定的な要因ではないが、「事」や「山」や「出」のようにまん中に一本線が通っているのも無視できない。

このようにまとまりのよい形を分けようとすれば、「上下」にしか分けられない。予測の「上下に分けられる字」のリストのうち、17名以上の学生が「分けられない」とした「美」「市」「並」もやはり左右対称の形であった。漢和辞典の部首索引には、象形文字や指示文字以外「分けられない」字はないが、学生の頭の中には、左右対称の形は「分けられない」字として存在する。

(表9)

	乗	良	弟	糸	金	飛	美
分けられない	64%	64%	61.5%	61.5%	59%	56%	54%
上下に分けた	25.5%	%	28%	28%	38%		41%
左右に分けた						25.5%	
た れ		12.5%					

(学生数39名中)

表9は同じように学生の半数以上が「分けられない」とした字の表であるが、表8と異なっているのは、「上下」あるいは「左右」に分けられるとした学生数が多いことである。字形を比べると表8のように単純ではない。真中に一本通った字が多いが、「良」や「糸」のようにそうとはいえないものもある。

学生にとって「分けられない」ということは、「どう分けてよいかわからない」ということでもある。それ故、決定的な手がかりのない字はみな「分けられない」と答える傾向がある。

予測と違ったのは、「円」でこれはその対称性故に「かまえ」に入らず「分けられない」と答えた学生が多かった。

また「品」は、「分けられない」24名、「上下」14名であった。

IV まとめ

学生の解答からみた部首索引には次のような傾向が見られる。

「左右」・・・象形文字あるいは前に独立した字として見た形を

手がかりに、ほとんど我々が当然とする分け方で分ける

「上下」・・・前に独立した字として見た形があればそれを手がかりに分けるが、なければ「分けられない」グループに入れる。

「たれ」「によう」「かまえ」・・・位置関係がはっきりしないため「左右」あるいは「上下」のグループに入れる。

「分けられない」・・・形として見て、左右対称のもの、または「事」のように中心を一画通っているものを入れる。

これらのグループ分けでは、部首の知識をふまえた分け方と、テストなどで漢字がよく書けるか読めるかといった評価との相関は見られなかった。これは学生が目の前の字を形としてどう分けるかに注意を集中しているからで、象形文字が「分けられない」グループに入るといった基本的な知識も、漢字の読み書きがよくできるグループとできないグループに差をもたらしなかった。

今後の指導としては、次のようなことに留意したい。

- ・象形文字、指示文字の字源と意味の結び付きを徹底させ、「分けられない」グループに入れる。
- ・「たれ」「によう」「かまえ」の位置と形を例をあげて示す。
- ・学生の分け方に従えば、「上下」に分けられる字と「分けられない」字は、漢和辞典の索引とかなり違った、もっと字形に応じた索引ができる。学生の日本語学習の目的が限定されたものであるなら、暫定的に「分けられない」字に、左右対称の字、真中に一本通った字を含めても良いと思われる。

学生にとって「読み」で引く音訓索引、「書き」で引く総画索引とも使いこなすのが困難という状況は多いと思われる。その点「形」で引く部首索引は、読み書きの知識とは別のもので、どんなレベルの学生にも引けるという利点がある。しかしながら、「上」と「下」に分けられる字あるいは左右対称の字は、部首索引だけでなく、音訓索引や総画索引と併用することによって、部首索引の問題点を、さげなければならない。

参考文献

- 1) 白石光邦 (1977) 「要素形的 漢字学習指導法」 桜楓社
- 2) 小林一仁 (1984) 「漢字の系統的指導」 明治図書
- 3) 渡辺茂 (1976) 「漢字と図形」 日本放送協会
- 4) 加納千恵子, 清水百合, 谷部弘子, 石井恵理子 (1987)
「筑波大学日本語研修コースにおける漢字学習プログラム」
日本語教育学会大会資料

部首索引 (ぶしゅさくいん, Radical Index)

1. へん

1. (人) : 化 仕 代 休 伝 位 何 作 住 体 低 価 使 信 便 個 借 備
働
2. (口) : 呼 味
3. (土) : 地 場 増
4. (女) : 好 始 姉 妹 婚
5. (弓) : 引 強
6. : 行 彼 後 待 得 術
7. (心) : 忙 性 情
8. (手) : 打 扌 折 投 押 指 待 接
9. (水) : 決 泳 泣 治 注 泊 法 油 海 活 洗 洋 消 流 酒 濟 深 涼
温 減 港 渡
10. : 院 降 階
11. (火) : 畑 燒
12. (日) : 明 映 時 晴 晚 暗 暖 曜
13. (木) : 村 林 相 格 校 森 様 横 橋 機
14. (方) : 放 旅 族
15. (牛) : 物 特
16. (王) : 現 理
17. (肉) : 服 脫
18. (矢) : 知 短
19. : 私 利 和 科 秋 移
20. (糸) : 約 紙 經 細 終 組 結 絡 統 練 線
21. (言) : 計 記 設 訪 試 話 語 誌 說 読 課 談 調 論 議
22. (車) : 転 輕 較
23. (金) : 鉄 銀
24. (食) : 飲 飯 館
25. (馬) : 馱 駿

2. つくり

1. (力) : 効 動 勉 働
2. (刀) : 切 初

3. : 別 制 到 割 利
4. : 北 比 化
5. (口) : 加 知 和
6. : 都 部
7. () : 故 政 教 数 放
8. (斤) : 所 新 折 近
9. (月) : 期 朝 明
10. (欠) : 次 歌 飯
11. (寺) : 待 持 時 特
12. () : 雜 難 離 進
13. (頁) : 頭 顏 願 類 題

その他 (左右) : 外 礼 竹 町 冷 社 形 对 取 非 的 研 婦 狭 弱 眠 残
料 配 野 報 路 辞 静 親

3. かんむり

1. : 今 会 全 合 食 金
2. : 市 交 卒 京 夜 変 高 文 立 方
3. : 友 左 右 有
4. : 安 宅 字 完 実 定 客 室 宿 家 寒 寝 案
5. : 花 英 苦 若 茶 荷 落 葉
6. (土) : 寺 走 赤
7. (口) : 号 足 兄
8. (日) : 早 暑 最
9. : 老 考 者
10. : 学 覚 營
11. : 空 究 窓
12. (竹) : 笑 第 答 簡
13. (雨) : 雪 雲 電

4. あし

1. : 元 兄 先 見 壳
2. (力) : 男

3. (口) : 古 台 告 喜 石 右 名 品
4. (女) : 要 妻 安
5. (日) : 音 春 書 者 暑
6. (心) : 忘 念 急 思 惡 悲 意 感
7. (木) : 案 集 樂 業
8. : 点 黒 無 熱
9. (月) : 青 育 有
10. (田) : 留 番
11. (貝) : 員 貸 買 費 質 贄 資

その他(上下) : 分 公 予 冬 写 当 色 毎 受 歩 表 長 岩 直 具 美 単
 県 発 夏 前 島 真 産 習 着 齒 奥 農 準 置 業 驚

5. たれ

1. : 原 歴
2. : 広 店 府 座 席 度
3. : 局 屋
4. : 病 疲 痛

6. かまえ

1. : 内 肉 同 円
2. : 区 医
3. : 回 困 囧 国 園 四 田
4. (門) : 門 問 閉 間 開 聞 関

その他 : 向 風

7. によ

1. : 近 返 送 退 速 通 連 週 進 運 過 遅 道 遊 違 遠 適 選
 2. (走) : 起
- その他 : 建 勉 題

8. 全体で一つの漢字

- 1画 : 一

2画 : 二 七 八 九 十 人 入 力
 3画 : 三 口 土 山 川 子 女 上 下 大 小 夕 千 万 工 々
 4画 : 日 月 火 水 木 五 六 手 午 牛 中 円 少 太 不 止 方 父 天
 夫 文 欠 反 心
 5画 : 四 田 目 石 本 平 半 主 正 白 由 必 出 立 母 生 史 用 失
 以 民
 6画 : 耳 米 糸 自 曲 百 西 年 両 共 成 式 多 名 気
 7画 : 車 貝 来 言 求 良 弟
 8画 : 雨 東 事 果 金 並 画
 9画 : 重 乘 品 昼 飛 南 面
 10画以上 : 商 馬 鳥 魚 器